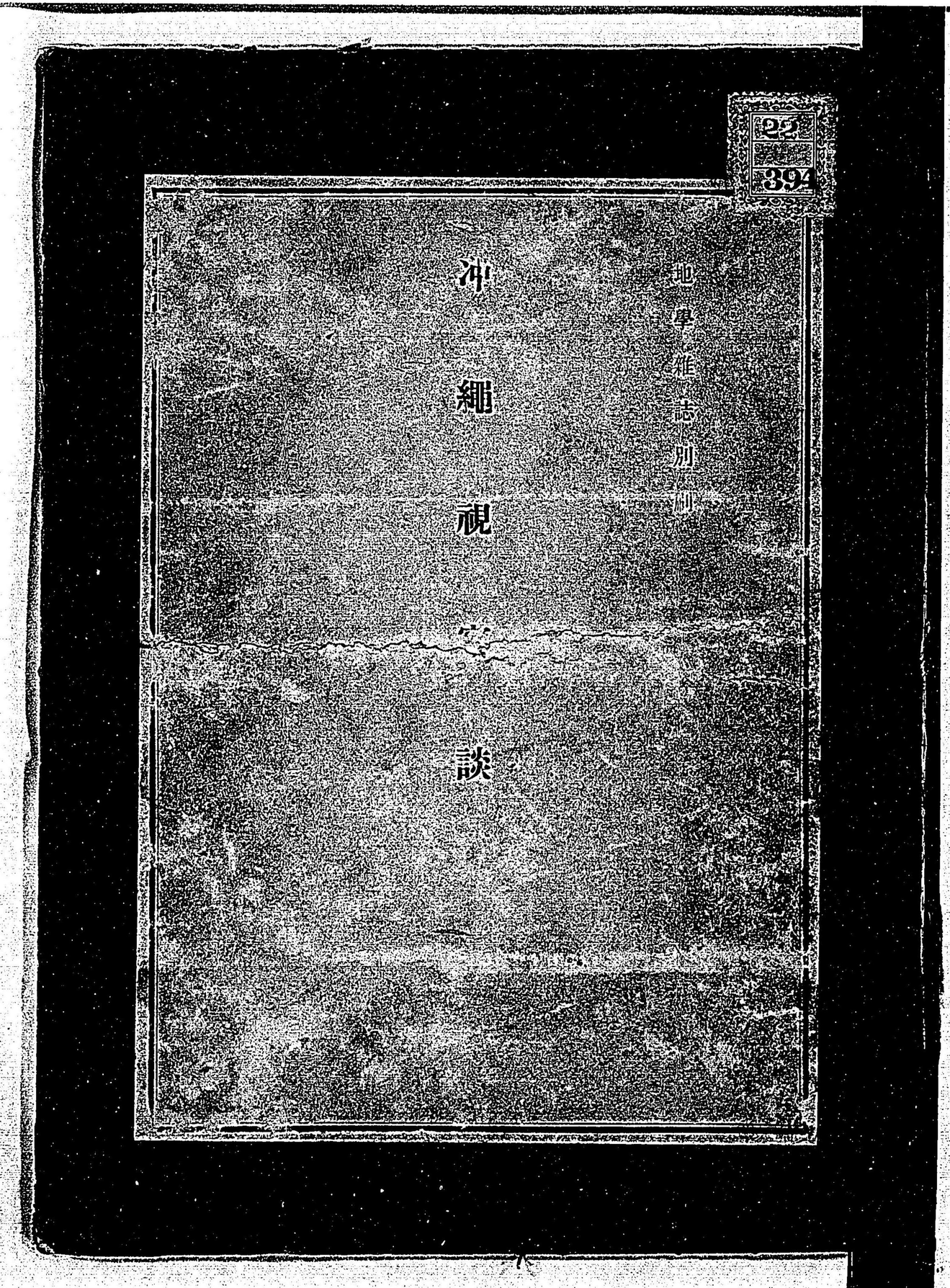


026151-000-2

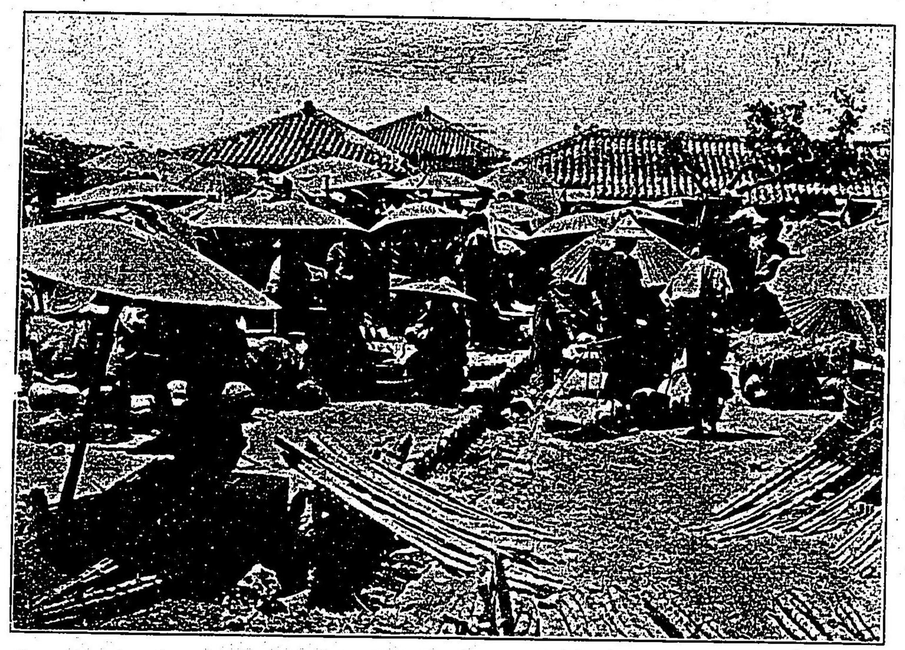
22-394

沖繩視察談

脇水　鉄五郎／著

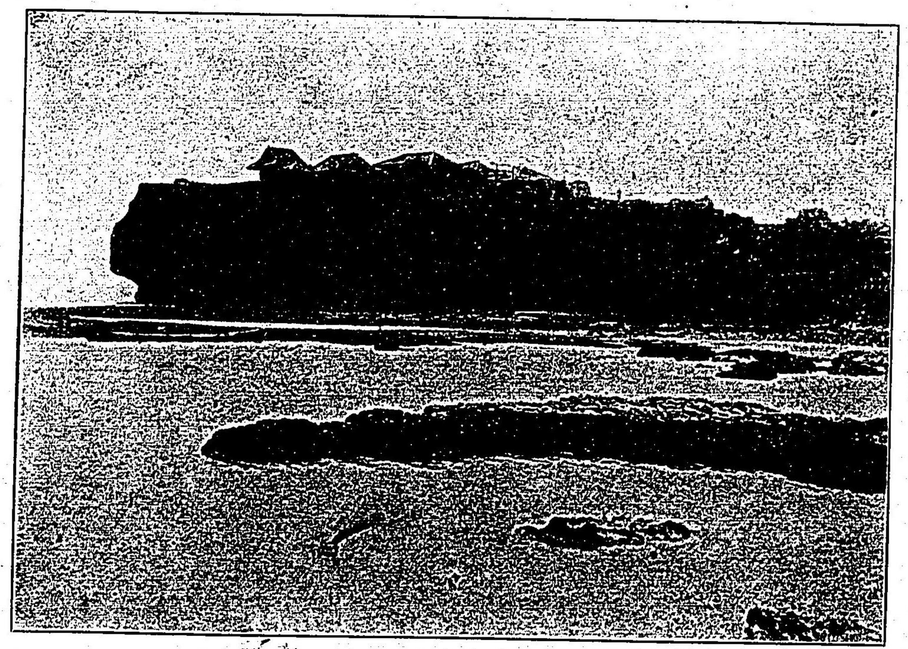
M40

ADC-3826



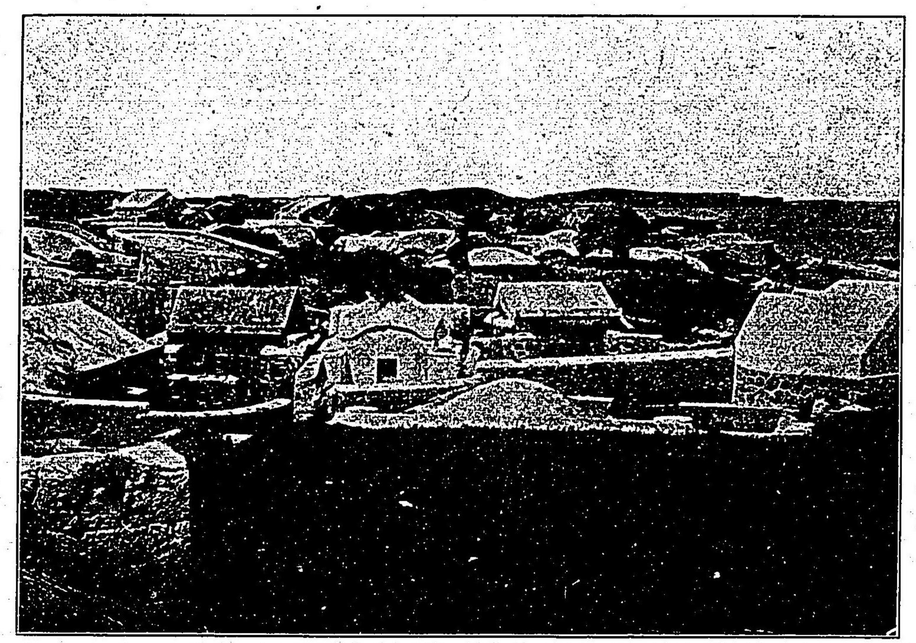
第十三版第一圖 那覇市物市場

Market of Naha.



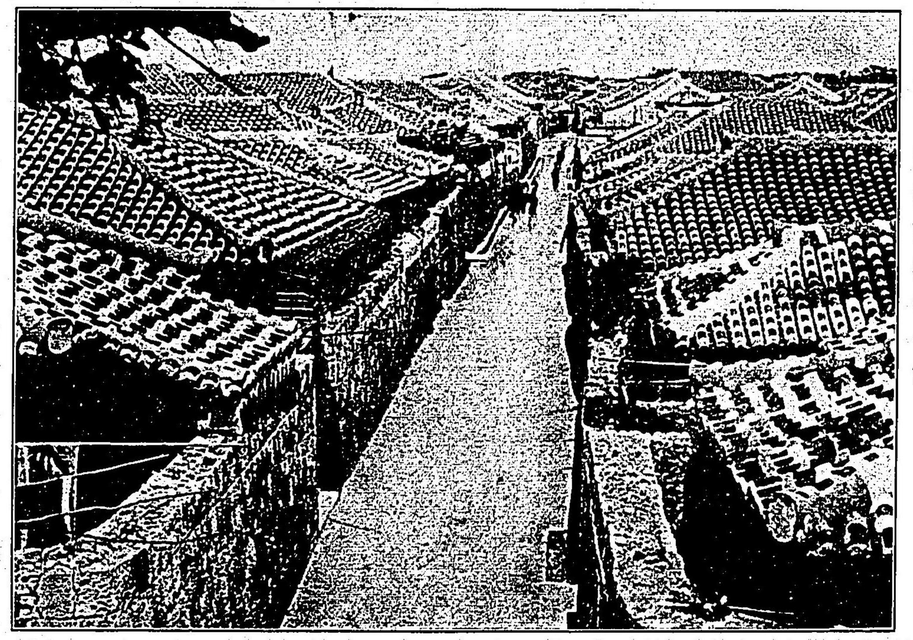
第二圖 波上宮と石筍崖

Bluff of Namnin



第十四版第一圖 波上附近の墓地

Cemetry near Nammin.

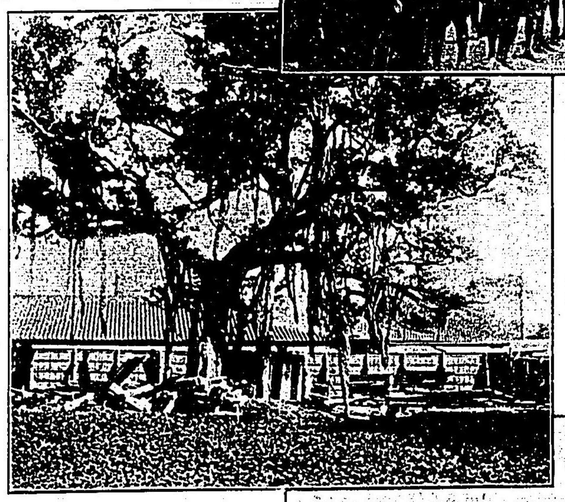


第二圖 那覇市街の一部

A Street in Naha.

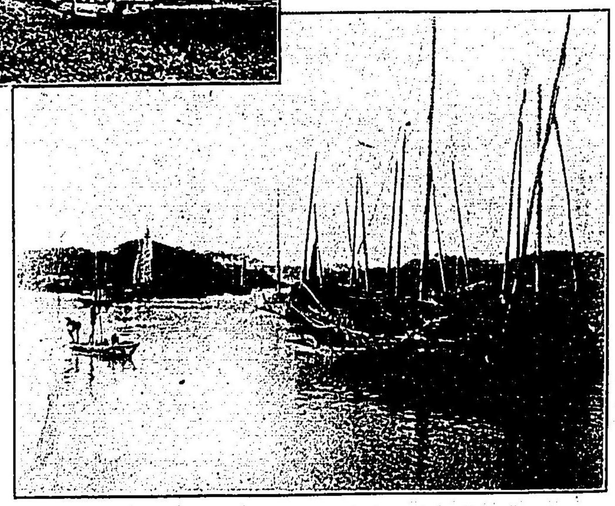
Fig. 1. School boys of Ginowan, Okinawa

第十六版第一圖宜野灣小學校生徒



第二圖カジュマル樹

Fig. 2. The Gajumaru Tree(*Ficus retusa L.var.nitida,Mq.*)



第三圖那覇港内に於ける山原船

Fig. 3. The Yambara Junks in the Harbour of Naha

22-394

沖繩視察談

理學士　脇水鐵五郎

著者

本年夏季我東京地學協會は沖繩縣下に講習會を開くことゝなり、予は講師として之に赴きしを以て、本日は報告かたゝ視察の大要を述べんとす。然れども旅行の目的もと講習にありしを以て、廣く島内を巡回するを得ず、僅に那覇首里の附近と慶良間(ケラマ)粟國(アグニ)の二島とを視察し得たるに過ぎざれば、述ぶる所廣く全般に亘るを得ず、不完全ながら左の諸項に分ちて視察の大要を述べ暫時の清聽を煩さんとす。唯見聞狹く觀察鈍くして述ぶる所杜撰の點多かるべきは演者の豫め深く謝せんとする所なり。

一、沖繩島の地勢地質及び氣候
二、那覇と首里
三、琉球人即沖繩土人の言語、風俗、宗教、教育、思想の變遷等
四、產物及び生業(動植鑛物と農業、林業、工業、水產業、商業等)

(一) 沖繩島の地勢地質及び氣候

○琉球列島　九州臺灣の間に弧形をなせる琉球列島は地勢上大隅諸島(或は隼薩諸島といふ)土噶喇七島(或は川邊七島ともいふ)大島諸島沖繩諸島先島諸島(更に宮古群島と八重山群島とに分つ)尖閣群島(即ちセナクル群嶼)の六大群に分たる。而して邦制上大隅土噶喇大島の三群は鹿兒島縣に沖繩以下の三群は沖繩縣に配屬す。

○沖繩諸島と沖繩島　沖繩諸島は琉球列島の中央に位し、十七の屬島を有する沖繩島と慶良間伊平屋の二群島、久米粟國渡名喜の三離島を包括す。沖繩島は該諸島の主島たるのみならず同縣下の最大島にして面積約百六十方里周回百十四里東北より西南に延長し長さ約四十里に及べども幅狹き處は僅に一里廣きも八九里を超へず

惟ふに琉球なる名はもと支那人の名づけしものにして隋元等の古書には流求、瑠求又は流虬に作る。沖繩島の形が虬龍の蜿々たるに類するを以て斯く名づけたりと云ふ說あれども疑はし。然れども沖繩島の形を以て龍に比する必ずしも當を得ざるにあらず。若し龍首を北にありとせば龍の頭胸腹部を占むるは國頭にして腰のあたりを中頭、尾に當る處を島尻と云ふ。此三區分は遠く藩王時代より存するものなるが、今も之を以て郡名とし、曾に政治上歷史上の著明なる地方名たるのみならず、亦質に地形上地質上の須要なる區分たり。

○國頭地方　は沖繩島の三分の二を占め、古生代或は其以前の古き層狀岩より成り、地勢嶮峻にして高峰あり深谷あり、山腹は翠綠滴らんとする密林を以て蔽はれ、河流は涓々たる清泉によりて養はる。然れども山急にして耕地少なく、交通亦極めて不便なるを以て人烟甚だ薄く、住民は半ば農を業とし半ば林を業とす。故に一に山原の稱あり、即ち中頭、島尻の農業區に對する山家の意なり。

山脈は高低參差一樣ならずと雖恩納、名護、久志、伊部、(沖繩最高峯1623 feet)與那覇、西銘等の高峰を連ぬたる中軸線は島の中央より稍西に偏して島形の如く東北——西南に走り、其西北側は急斜して海に入り屢絕大の斷崖をなす。東南側は之に反して傾斜急ならず其の北半は臺地狀をなし一百尺乃至三百尺の絕壁をなして海に臨み、南半は緩斜面をなして沿海に平地を存す(黑岩氏に從ふ)

本部半島は直線的なる國頭西海岸の單調を破りて西に突出し、中に嘉津宇岳(1557 feet)の高峰あり石灰岩より成る。

徳永氏に從へば國頭主部の古生層は粘板岩砂岩輝片岩角閃片岩及びシャールスタインより成り、層向は山脈の趨向と同じく約ね N.E—S.W にして N.W に傾く。此等の岩層を被ふて本部半島を成せる石灰岩硅岩の厚層あり、西岸の低地には第三紀層及び隆起珊瑚礁ありて處々に發達す(東京帝國大學紀要理科第十六冊第一號吉原氏「琉球弧島の地質構造及び臺灣北部との關係」なる論文參照)

○中頭島尻地方　は全島の殘りの三分一を占め、國頭地方とは地勢大に異なりて、波狀の起伏をなせる第三紀の小丘及び隆起珊瑚礁より成る。珊瑚礁は必ず臺地をなし、臺地の緣邊は急壁をなして岩骨露出し、沖繩松及び蘇鐵の粗生する外他の樹木の繁生するもの殆どなし、又臺上は土層厚から

す且つ疲瘠なりと雖蔗圃藷園相連なりて一望寸地を剩さず、從て河流水に乏しく水あるも濁水尼をだも洗ふに勝へず、即ち此地方は耕圃萬項の偉觀あれども山紫水明の美景を欠き國頭地方とは大に趣を異にせり。

○中頭島尻地方の第三紀層　此地方の第三紀層は(1)青鮫色の板泥岩(Glauconite 稀に凝灰質なるものあり)(2)細粒赭色砂岩と砂質板泥岩と青色マール質板泥岩の細かき互層(稀に凝灰質石英砂岩を挿む)(3)細粒赤褐色の砂岩より成る。最後の砂岩中には屢青色石灰質の堅き砂岩塊(盤狀或は塊狀)を包み土人之を「ウジマ」と稱す(其堅硬なるが爲に屢墓碑材に用ゐらる)

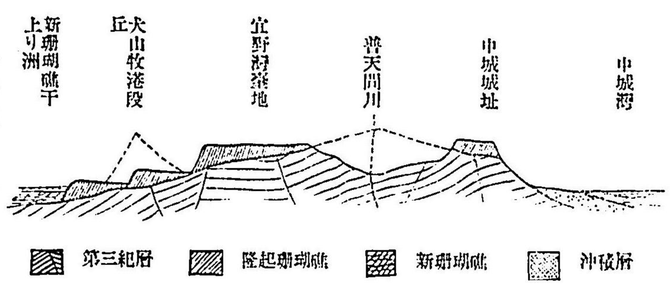
德永氏は糸滿村附近にて下層の砂岩中に小形の Operculina(有孔蟲の一種)を採集せしが、予は中城間切(ナカグスクマキリ)浦添間切(ウラソエマキリ)等に於て青色板泥岩中に德永氏の記載せざる多數の小形有孔蟲類化石あるを發見せり。尙ほ上層及び中層の板泥岩中には有孔蟲の外、小形の貝類デンタリューム、樹枝等の化石を含有せり。

第三紀層は斷層褶曲撓曲等をなし、成層後に造山的變動を受けたる證跡歷々たり。走向は區々にして種々に轉向すれども、大体は首里を中心をして一大彎曲をなすもの丶如く、傾斜は約ね緩なり

第三紀層の分布より見るに、中城灣の沿岸より島尻の中部に至る間は第三紀地盤の最も隆昂せし部分にして、隆起珊瑚礁は此隆昂部を中心として四方に發達せり。

此隆昂部の第三紀地盤は、珊瑚礁として其四周に發達せし當時にありては、今日よりは遙に高く國頭地方とは獨立して島嶼の狀をなせしものなりしが、珊瑚礁と共に隆起せし後は、珊瑚礁よりも削磨せらるゝこと早きが故に、今は却て珊瑚礁臺地よりも低くなり居れり。左圖は中頭の中部を東西に横ぎりたる截斷圖にして、這般の關係を示すに最も適切なるものなり。

第一圖　中頭中部東西横斷面圖



○珊瑚礁臺地及び段丘　抑珊瑚礁臺地たるや、沖繩縣の中樞たる沖繩島南部の大部分を占め、獨り特異の地形を此部に與へたるのみならず、島の農工業等人文に關する關係亦甚だ大なるものあるに由り、特に數言を費さんとす。

臺地をなせる珊瑚礁の厚さは約ね三十尺を出でず、其基盤たる第三紀丘陵の大部分尙未だ水面上に出でざりし洪積期の時に當り、其海岸に緣礁或は堡礁となりて發達せしこと、恰も現時同島の沿岸を緣付けつゝある新珊瑚礁の如きものなりしが、其後地盤の一般隆起作用起りて、現今は首里城外の辨ヶ嶽の如く、約六百尺の高さにまで水面上に持上げらるゝに至れり。

其の幅員の大なるものは殆ど水平なる臺地をなし、上表面は厚數尺に達する特有の風化土たる「マーヂ」を以て蔽はれ、甘藷の好栽培地として一般に耕さるゝと雖、臺地の緣邊は概ね數十尺の斷崖をなして一段低き臺地に終る。此一段低き臺地は亦隆起珊瑚礁より成りて、其表面は前臺地よりも一層厚く且つ稍肥沃なる壤土質「マーヂ」を以て蔽はれ、更に第三の珊瑚礁より成れる低臺地に下り、終に尙ほ新珊瑚礁を生じつゝある海底に終る。其狀第一圖に示すが如く、中頭西海岸及び島

尻南部に於ける一般の通則なりとす。獨り中城灣沿岸には同灣の大陥落起りしが故に、珊瑚礁の段丘を見る能はざるなり。

此の如き段丘は、珊瑚礁の隆起作用が第三紀以後兩三回繼續的に起りしことを證明するものなり。而して隆起作用は其後も未だ全く止まず、現今沿岸に成生しつゝある新礁も亦徐々に隆起しつゝある者の如し。新礁の隆起は西海岸に殊に著しく、干潮時には一二尺の高さに干上がる處あり。其干上るや表面の凹凸は、細かき砂を以て一樣に埋められるゝを以て、一見砥の如き幅數町の沙場を海濱に現出するに至る。大嶺糸滿間の海岸の如き其最も著しきものにして、那覇より舊道を取りて糸滿に至る時は、人力車は干潮時を選みて二里の間、此干上り礁の上を通行す。頗る奇觀なり。又此干上り礁は天然の好鹽田たるが故に糸滿大嶺間の志茂田村附近、那覇區の潟原等に於ては盛んに製鹽を營みつゝあり。那覇港口の如きも珊瑚礁の成生と此隆起作用との爲に船舶の出入益困難なるに至れり。

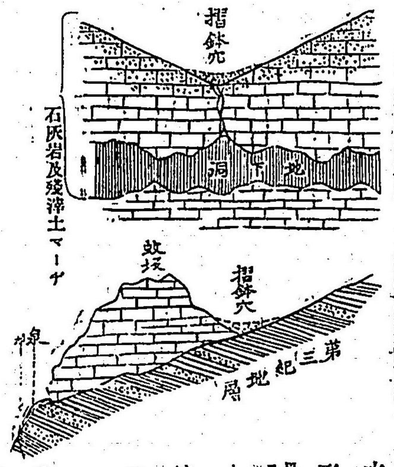
隆起珊瑚礁の幅員大ならざるものは第三紀丘陵の山側を緣付けたる緣礁の如き形をなし、臺地を作らず。他の部分より突出して小山脈の形を成せり。那覇區の南に連なれる蛟坂（ガッチンビラ）の阜丘の如し。

○石灰洞と摺鉢穴　次に珊瑚礁臺地に特有なるは石灰洞と摺鉢穴（Sinkhole の原語は落ちこみたる穴の意味なれども直譯に依らず其形に因りて名づくなり）となり。凡そ石灰洞は石灰岩地方に最も普通なるものにして敢て異とするに足らざれども、沖繩島に最も名高きは宜野灣間切の普天間の岩屋なりとす。

普天間の洞窟は窟内に航海者の崇拜する普天間宮（海神を祀る眼鏡の琴平宮に比すべきものなり）を安するを以て其名

高し。洞は地表より直に下に向つて入り、深さ四五間、東南は西北に廣がりて約二十間もあるべし、天井の厚さは現今約十尺を出でざれども、鍾乳石及び石筍の發生甚だ盛にして洞内殆と餘隙なし。

此の如き洞窟は其數甚に夥しく、宜野灣臺地の附近のみにても、普天間窟の外、宜野灣役場の南北谷（ヤンバルキナトバ）、牧港（朝の出港せし處）等にあり、其の地下に埋存して吾人の目に觸れざるものに至りては其の數更に多きは疑なし。摺鉢穴は斯かる地下埋伏洞或はトンネルの存在を吾人に教ふるものなり。



第二圖　摺鉢穴及地下洞窟關係斷面圖

第三圖　蛟坂附近摺鉢穴組織斷面圖

摺鉢穴は地下洞の天井薄き處陷落するか、或は割目を透して水の滲入する場處ありて、其四周の土壤次第に削られ遂に摺鉢形の窪となりたるものなり。第二圖に示すが如し。穴の直徑の最上部に於ける横徑を云ふ）小なるは十數間、大なるは四五十間に及ぶものあり、深さ之に準ず。穴の底に水の溜まりたるものあれども、多くは四方より流れ來たる雨水などは、少時にして滲下し去るを常とす。

斯かる窪穴は宜野灣の臺地のみにても數十を以て算ふべし。全島に於ける數は幾千あるや計り難し。摺鉢穴の著しきものは島尻南部の玉城間切、具志頭間切等の臺地に多く、玉城城址の西麓及び具志頭のガラガラ穴の如き其の最も著名なるものなり。（ガラガラ穴は穴の底に少き堅孔ありて地下洞に通じ石を入る

れば（カラ〳〵と音して落ち行くに由りて斯く名づく）

又珊瑚礁と第三紀層の境にも同樣の摺鉢穴を作ることあり。蓋し珊瑚礁上に降りたる雨水は摺鉢穴或は其他石灰岩中の割目を通して地中に入り、基盤をなせる第三紀層に逢ひて地下に潛流を作す（第三紀の地盤は板泥岩といへども頁岩なるが故に此潛流の道筋に當る處に時に且つ節理等の割目少なくして立派なる不透水層を形成す）

として摺鉢穴を生ずるなり。那覇の南境にある蛟坂（カヤンヒラ）の一摺鉢穴の如き其例なり（第三圖）。

斯の如く珊瑚臺上には處々に摺鉢穴あり、又岩に割目ありて、地上水は常に地下に滲入し去るが故に、臺上にては一滴の井水だも得ざること多し。之に反して臺端の崖壁には珊瑚礁と第三紀地盤との間に地下水の湧出して清泉を作ること少からず。彼の有名なる首里城内の龍樋（リュウヒ）の瑞泉及び那覇市外の落平樋（ラクヘイヒー）の泉の如き何れも其好例なり。

○珊瑚石灰岩　隆起珊瑚礁を成せる珊瑚石灰岩は、其原料たる珊瑚の構造殆ど全く湮滅して、肉眼にても顯微鏡にても見るべからず。珊瑚の形骸は機械的に破壞せられ又一部分溶解せられて砂狀をなし、共棲せし貝類甲殼類等の破片と共に集合し、且つ多少別種の土砂を混じて、粒狀組織を呈するものあり、又一部分結晶質となれるもあり。之を現代の新珊瑚礁に比すれば比重大に、色は概ね淡黃色を呈せり。新珊瑚礁は色白くして輕く、珊瑚の原構造明かに保存せられ、大氣に曝露する時は漸次に灰色となり、終に黑色となるによりて、舊礁の珊瑚石灰岩と識別せらる。

舊礁中には化石として二三種の珊瑚の外、Mollusca 及び Brachiopoda の數種と Bryozoa, Echinoidea, Crustacea, Foraminifera 及び Radiolaria の數種を含めり。就中德永氏の記載したる大形の有孔蟲 Operculina の二三

種の如き最も著しきものにして到る處に發見せらる。

此等の原成的なる石灰岩の外、角礫質或は砂質の石灰岩あり、前者と互層し、或は不規則に前者の間に挾まりて存す。

○珊瑚石灰岩の風化土　珊瑚石灰岩の風化して生じたる殘滓土は方言「マーヂ」（眞土のと稱し、赤色の粘氣強き粘土にして、植物養分殊に燐酸に乏しく、不毛の土壤なり。其或ものは從來より石灰岩中に混入せし土砂を交へ、多少壤土質に傾く。第三紀板泥岩の風化土は土人之を「ジャカル」といひ、板泥岩の機械的に碎けたるまゝの青色或は灰色の埴土なり。其質重粘に過ぎ乾燥せば龜裂して植物根を害すること甚しく、物理的性質に於て完全なりと謂ふべからざれども、植物養分に富み、熊本農事試驗場にて行ひたる肥料試驗は燐酸及び石灰の含量殊に著大なるを示せり。農民亦經驗的に之を知り、古來「ジャカル」を取りて「マーヂ」に加へ、肥料に代用し居れり。蓋し「ジャカル」の燐酸及び石灰に富めるは、前述の如く板泥岩中に多量の有孔蟲等の化石を含有せるに關す。（熱帶多雨の地に普通なる紅土 Laterite の類は全島を通じて見る能はず）

珊瑚礁の台地は、其風化土たる「マーヂ」の養分に乏しきを以て、植物の生長惡しく、之を第三紀の丘陵又は沿海の低地に比すれば、一見して兩者の間に多大の差異あるを見る。但し中頭島尻地方にては、沿海の低地といへども、他の地方に普通なる砂礫又は粘土より成れる肥沃の沖積土を見ず此等の位地も亦珊瑚礁より成れるは前陳せし所の如し。只其風化土中には台上より流れ來れる多量の粘土、砂、植物質等を混するを以て、比較的豐饒なりとなすのみ。

此の如き疲瘠の地多きは、沖繩島をして甘藷の主産地たらしめたる所以なり。何となれば川に水なく又平地少なくして水田を起すに由なく、耕地の大部分を占むる「マーヂ」は疲瘠にして、麥陸稻等の雜穀を作るに適せず、斯かる土地には甘藷の如き疲瘠の地にも尙ほ能く耐ゆる農作物を栽培して、常食に充つるの外、良策なければなり。

○海岸線　繞て本島の海岸線に就て見るに、國頭の西北海岸は本部半島の單調を破るなければ、北東――南西に向つて一直線に走り、大なる出入なし、是れ此海岸に沿ふて一大斷層線の走るに由りてなり。從て本部半島の突出の爲に生じたる名護運天等の外、大船を泊すべき港灣なし。

斬波一に磯波岬に作る以南海岸線の趨向一轉して南北に走り、島形と同じく「く」字形をなす。此間那覇江の切込める外、海岸線の出入に乏し。

東岸は之に反して海岸線の趨向一線をなさず、殊に南部に著しき二大灣入あり、北にあるを金武灣、南にあるを中城灣といひて、勝連半島を以て界す。灣頭に伊計島外六島ありて風波を防ぎ、灣底水深くして如何なる大船も泊するに難からず。唯灣の入口に暗礁多くして出入に困難なるを欠點とす。

中城灣には與那原及び馬天の二港あり。與那原は北部國頭地方より木材薪炭を載せ來る山原船の輻湊する處にして、那覇港と腹背して那覇首里の裏門口たり。馬天港は佐敷間切にあり、日清戰役に際し、我海軍は茲に貯炭所を設けたることあり、一時軍港を以て擬せられしが今は廢せり。中城灣の形勢は尙家の忠臣護佐丸の居城たりしを以て有名なる中城城の上より望めば一目瞭然たり。弓の如き海岸遠く連なりて沿岸に一帶の平地を控へ、水田茲に開けて本島に於ける米作の主場とす。米國提督ペルリ嘗て此城に上り、坐ながらにして日月の海より出でゝ海に入るを見得るは此地の外なけんとて、大に其絶景を賞したりと云ふ。蓋し其地高くして東西兩洋を一目に望み居れば

なり。

凡沖繩島の沿岸には、到る處新珊瑚礁の發育を見ざるなしと雖、黑潮の影響によりて其發育に大差あり。黑潮は南南西より北々東に向て流るゝが故に、本部半島以南東岸の知念岬に至る間は、波高く流急にして最も珊瑚の生長に適すれども、夫より以東北の海岸は、島の蔭に當りて水波穩に珊瑚礁の發育前者の如く盛ならず。

沿岸に於ける珊瑚礁の發達は、本島の港灣に大影響を及ぼせり。那覇港の如き、現今本島唯一の海門たりと雖、港內狹くして干潮內外の滊船僅に二三艘を繫ぎ得るのみ。而かも港口には珊瑚礁密布繁生して、船舶の出入極めて危險なり。滊船の出入には唐船口と稱する唯一條の水路あるのみ。

○氣候　氣候は緯度熱帶に近く（北緯二十四度より二十七度に至る）溫暖なる黑潮に洗はるゝを以て、全年を通じて暑氣强きは勿論なれども、一年の最高溫度は却て東京より一二度低きを常とす（那覇に於ける最高溫度は三十四度なり）故に夏季と云へども日中平均溫度は東京と大差なけれども、濕氣多くして皮膚の蒸發を妨ぐるが故に、非常に蒸暑きを感じ、又日射强きが故に室內と室外とに於て暑を感ずることの差甚し。而して生活上最も困難を感ずるは、晝夜溫度の較差極めて少なきにあり（晝夜溫度差年平均三度）即ち盛暑の候にありては、夜に入りても夜半までは涼を覺へず、涼を覺ゆるは拂曉前二三時間の間なり。然れども晝間は

海風常に涼を送るあり、風通しよき室内にあれば、敢て暑に苦しむことなし、實に琉球にありては風の快味を感ずること内地の比にあらず。

一日中の温差少なきと同様に、年温差も亦少なく（約十二度）四季平均温度は非二〇、七夏二八、四秋二三、九冬一六、三にして、琉球の厳冬は東京の四五月に當れり、故に島人は冬期といへども、單衣の襲着又は袷にて凌ぎ綿入を着することなし。

本島は氣温高きがゆへに、對比濕度は敢て内地に比して高しと云ふべからざれども、絶對濕度即水蒸氣張力は概して大なり（水蒸氣張力七月最大二二、三ミメ二月最小九、八ミメ　對比濕度六月最大八四、八％十二月最小七〇、〇％）

本島は内地と同じく氣節風域に屬し、一般風向は春は北、夏は南、秋と冬とは北東を主とし、無風の日は少なし。而して大氣の濕度及び雨量は、風位と密接の關係を有す。即ち冬期雨少なきは乾燥せる北風連吹の結果にして、一二月を最も乾燥の月とし、雨量亦少し。（二月平年雨量一一五、四ミメ）五月より六月に亘りては、南風漸く起り、北風と混亂して雨を起し、六月は最多雨の月とす（六月平年雨量三〇九、四ミメ）而して水蒸氣張力は七八月に及んで最大に達すれども、此時は南風全く卓越し、天氣一定して雨量却て減ず、本年七月下旬より八月中旬に至る間の如きは、稀なる旱魃を告げ三旬の長きに亘り殆ど一滴の雨をも見ざりき。然れども雲量常に多く、天氣の不定なるは此島の名物にして、晴好の日といへども一日數回の驟雨を見ることあり、土人の家を出づる必ず傘を携ふるもの寔に以あるなり。

本島及び八重山列島附近は、臺灣呂宋と共に低氣壓の發生地にして、夏秋の交には、時として狂暴なる颶風（土人の謂ゆる大風）に襲はるゝことあり、其勢の猛烈なる到底内地人の想像する能はざる所なり。又近海には屢龍卷を起し、疾風驟雨を伴ひて野に菜色なきに至らしむることあり。故に土人の暴風を恐るゝを殊に甚しく家を繞らすに高き石墻を以てし苦熱を恐びて風害に備へつゝあり。

（二）首里と那覇

○間切及區の稱呼　古來琉球にては民家の聚團を村とし行政上數村を合して間切（マギリ）とす。恰も内地新町村制に於ける村の如し。而して間切の市街地をなせるを區とす、恰も内地の市の如きものなり。

○沖縄縣下の二區　沖縄縣下に二區あり、那覇及び首里是なり。相去る僅に一里十餘町、相倚りて沖縄島の首腦をなす。然れども首里と那覇とは元其の發達の原因と歴史を異にし、政變に由りて盛衰榮枯互に相容れざるものあり。

○首里區　首里は開國以來琉球王の都せし處にして、其の居城を首里城と云ふ、城は區内最高の丘上に據り、繞らすに石灰岩にて築きたる石垣の外郭を以てす。今は城内大に頽廢したれども、尚舊時の殿閣樓門等依然として存在す。

先づ那覇より車馬絡繹たる縣道を東すること約一里、觀音堂の長坂を上り盡せば爰に中山門あり、之より進むを四町餘にして守禮門（守禮之邦と署したる扁額を掲ぐ）あり、尚は進むこと二町にして城の正門たる

歡會門に達す。此門を入り右折して上れば瑞泉門あり。門の傍に清泉龍口より湧出す。是即ち有名なる龍樋(リユウヒ)にして、往時王城内の用水たりしもの、大旱に逢ふも涸るゝことなしと稱せらる。

瑞泉門を入り左折すれば漏刻門あり。樓上漏水器を藏するを以て名づく。更に進めば廣福門あり。門内に七百八十坪の廣場あり。此の廣場の東に西面するを奉神門と云ひ、王殿の入口なり。門内に石を敷きたる方形の庭あり。廣さ五百坪之に面して正殿あり。高さ五丈七尺左右十五六間、結構明制に擬す。もと王廷及び外交上の式場に充てられたるものなりと云ふ。正殿の左に藩王の居室及び附屬の書院あり。右に在るを評定所とす。

正殿背後の石墻上より瞰望すれば、城の周圍に建列ねたる士族の邸宅及び商家を一目の下に見るを得れども、元と凸凹甚しき丘上に開かれたる都邑なるを以て街衢甚だ整はず。加ふるに近年漸を以て人口を減ずるの結果、城の東及南面は人家殊に疎なり。市の中心とも謂ふべきは城北龍潭(リユウタン)の畔にして、茲に靑物市場あり。

龍潭は龍樋の水の滙溜して池をなせるものにして、王城北門の外にあり。周圍三町四十九間。赤禍色の濁水を湛へ、芰荷を雜植す。名勝地誌等に淸漣澄徹遊魚數ふべしなどゝ記載するは僞なり。

沖繩縣師範學校及び高等女學校の校舍は元此の龍潭の東に臨みて建てられしが、卅七年一月中火を失して全部燒失せしを以て、目下は舊王城内の建物を假校舍に充て居れり。此の他首里には縣立中學校あり。工業徒弟學校あり。女子工藝學校あり。縣下須要の學校大抵此の地に集まれり。

首里は現今戸數五千五百、人口二萬三千を有す。往時は王城の所在地として國内第一の大都會たりしが、明治十二年藩制を廢して縣制を布き縣廳を那覇に置きしより、其の繁盛を那覇に奪はれ、日に月に衰頽しつゝあり。蓋し首里の地たる舊時王府の地たりし外、何等都會の發達に必要なる地理的要素を具ふることなければ、其の衰頽に赴くは寧ろ自然の數と謂つべし。

○那覇區　那覇は現今縣廳の所在地にして、縣下政治の中心たるのみならず、那覇港を有し、内地との交通運輸一に此港に由るを以て、兼て本島物資出入の門戸なりとす。藩王時代には政治の中心は首里に在りて、那覇は横濱の東京に於ける如く、首里の出入口たりしのみなりしが、明治十二年縣制實施以來政治の中心爰に移り、商工業も從て起り、今は本島の首都として日に月に隆盛に赴き、現今戸數九千八百、人口四萬三千を有するに至れり。

○那覇の市街と市場　市街は主として那覇江の北岸にあり。市の中央に隆起珊瑚礁より成れる小丘(松山)あり。此の松山と那覇江との間は市の主要部にして、東村、西村、久米村、久茂地村、泉崎村の五字に分たる。中に就き字東及び西は繁華の中心にして、縣廳、警察署、區役所、郵便局等皆此にあり。

警察署の後、郵便局の前に、琉球人の市場あり。數百の商婦茲に集り、大傘の下に露店を開く。市場商品により自ら區劃あり。郵便局前には陶器店あり。丼大の飯碗最も注意すべし。之に隣して道路の兩側には反物店、白米店、金物店、線香店等あり。其の東の廣場を靑物市場とす。(寫眞版參看)主要なる靑物は唐芋(即ち甘藷)冬瓜(大さ内地産に倍す)水菓子としての甘蔗、蓬等なり。黑砂糖に似たる味噌、灰色したる唐芋の葛、ステッキかと思はるゝ永良部鰻の干物(土人は之を滋養物と珍重す)等の珍物も茲にあり。豆腐の切賣も此處にて行はる。(琉球の豆腐は内地のより色黑くして遙に硬く内地の如く水中に貯ふることなく板上にて躍ぐ村落にては豆腐が石油箱に載せられて家の前に晒らさるゝを見ると厭なり土人の内地を旅行する

もの之を求めて食に充つと云ふ　市場は午前八時頃より夕景まで開かれ、午前十一時頃より午後二時頃までの間も雑沓を極む。

青物市場より少しく東すれば、泉崎村に近く魚市場及び豚牛山羊の獣肉市場あり、午前中最も雑沓を極む。屠獣場は字西村にあり、毎日三十頭内外の豚と六頭内外の牛を屠る。

○久米村　久米村は明の洪武二十五年、文學指導の任を帶びて歸化せる閩人三十六姓の子孫の部落せる處にして、市の中央にあれども別に一郭を成し、今に至るも他の琉球人と婚嫁せず、恰も神戸横濱等に於ける外人居留地の如き觀を呈せり。藩王は閩族を優遇し、教化の全權を擧げて其の門族に一任せしかば自然に尊大の風を養成し、他を輕視する癖多しと云ふ。

○若狹町潟原及び泊　松山の背後（西北）に當る處を若狹町と云ふ、此島特産の朱塗漆器を製する職工多く此處に住す。

若狹町の西、珊瑚礁の海中に突出せる一岩角上（文人此岩角を石筍崖と呼ぶ崖上に筍に似たる水蝕痕あるに因りてなり）に波上宮あり、縣下唯一の官幣社なり。岩角高さ五十尺、三面絶壁をなして海に臨み、崖脚深く凹入して海蝕の痕歴々たり。（寫眞版參看）崖上に立て四方を眺むれば殘波岬（或は斬波岬に作る）は遠く烟霞を北方に曳き、先原崎の近く斗出せる彼方には慶良間諸島の青螺呼べば將に應へんとす、又東南方には那覇市街を隔てゝ翠の帶を戴ける中頭島尻の丘陵起伏せるあり（前に述べし如く中頭島尻の丘陵は隆起珊瑚礁より成り丘上に松樹の林立せる有様馬の鬣に似たり）若し夫れ月夜に此に臨まば其の風光更に一段の清趣を加ふ。故に市人の茲に遊びて涼を納るゝもの、及び崖下に潮を浴するもの甚だ多し。

若狹町の東には潟原の鹽田を隔てゝ泊村あり、又那覇區に屬す。村の南端首里街道に面して崇元寺あり、琉球王歴代の神位を安置す。崇元寺の前を流るゝ國場川の南にある部落を牧志と云ひ、泡盛入の土器瓦イシバイ等の工場此邊に多し。

○那覇江一に漫湖　那覇の港は第三紀後に生じたる一大陷落灣にして、港口より十町計の間即ち御物城（或は見物城と稱し凡五百年前察度王の時外國と貿易せし貨物を貯藏せん爲に築きしものなりと云ふ石垣を築き上げたる一の盞なり今盞上に料理屋風月楼あり眺望立しの邊に至るまでの間は、恰も堀割の如き形をなし、幅僅に一町内外に過ぎざれども水稍深きを以て、入港の大小船舶は皆此間に繫留するなり。此の灣の如き入江は御物城の邊より東南に向つて大に擴張し、泥深く水淺くして大船を容るゝ能はざれども、潮滿つれば水波漫々として一大湖を現出す、之を那覇江とす。二川之に注ぐ一を饒波といひ、一を國場と云ふ。江内に二島あり、大なるを奥武山（今公園とす）小なるを鵝森と云ひ、古松影を倒にして風光畫くが如し。蓋し那覇江陷落當時の遺物なり。島の基部に第三紀層（板泥岩及砂岩）現はれ上に舊珊瑚礁を戴けるを以て知るべし。

此湖は元と現今の泉崎久茂地及び潟原の地を經て泊にて外洋に通じ、那覇は當時江頭の一島たりしこと舊記に見ゆ。地形上より推するも其の然りしを確なり。（今日にても泉崎潟原の地は甚だ低くして潮滿つれば海水路上に溢るゝを見る）

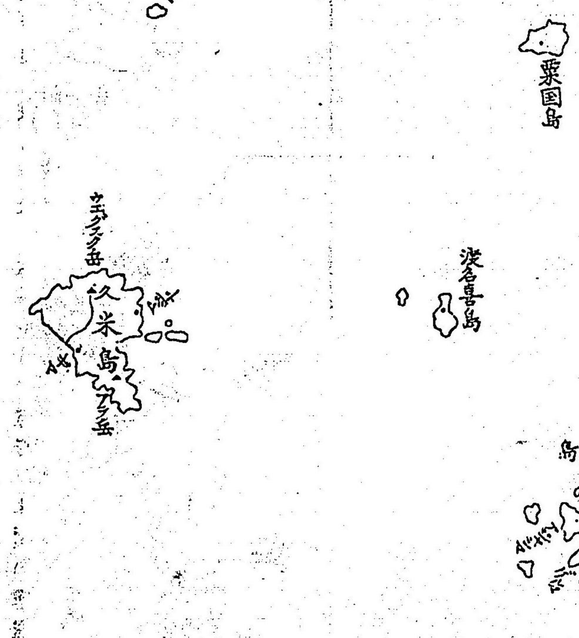
東村の南端字渡地の硫黄城趾より御物城の麓を經て南岸の垣花に至る間に、南及び北の明治橋を架す。長さ各三百尺餘、明治十六年の築造に係る。蓋し琉球に於ける大工事の一なるべし。橋上に立ちて四方を眺むれば湖山の風景大に掬すべし。然れども此橋は風光の美なるを以て重すべからず那覇より島尻に通ずる要衝に當るを以て貴とす。即ち橋を渡りて右すれば蛟坂の小坂を上りて糸

滿に通ずる新道、坦として砥の如く、左すれば江に沿ふて小祿村に至る。

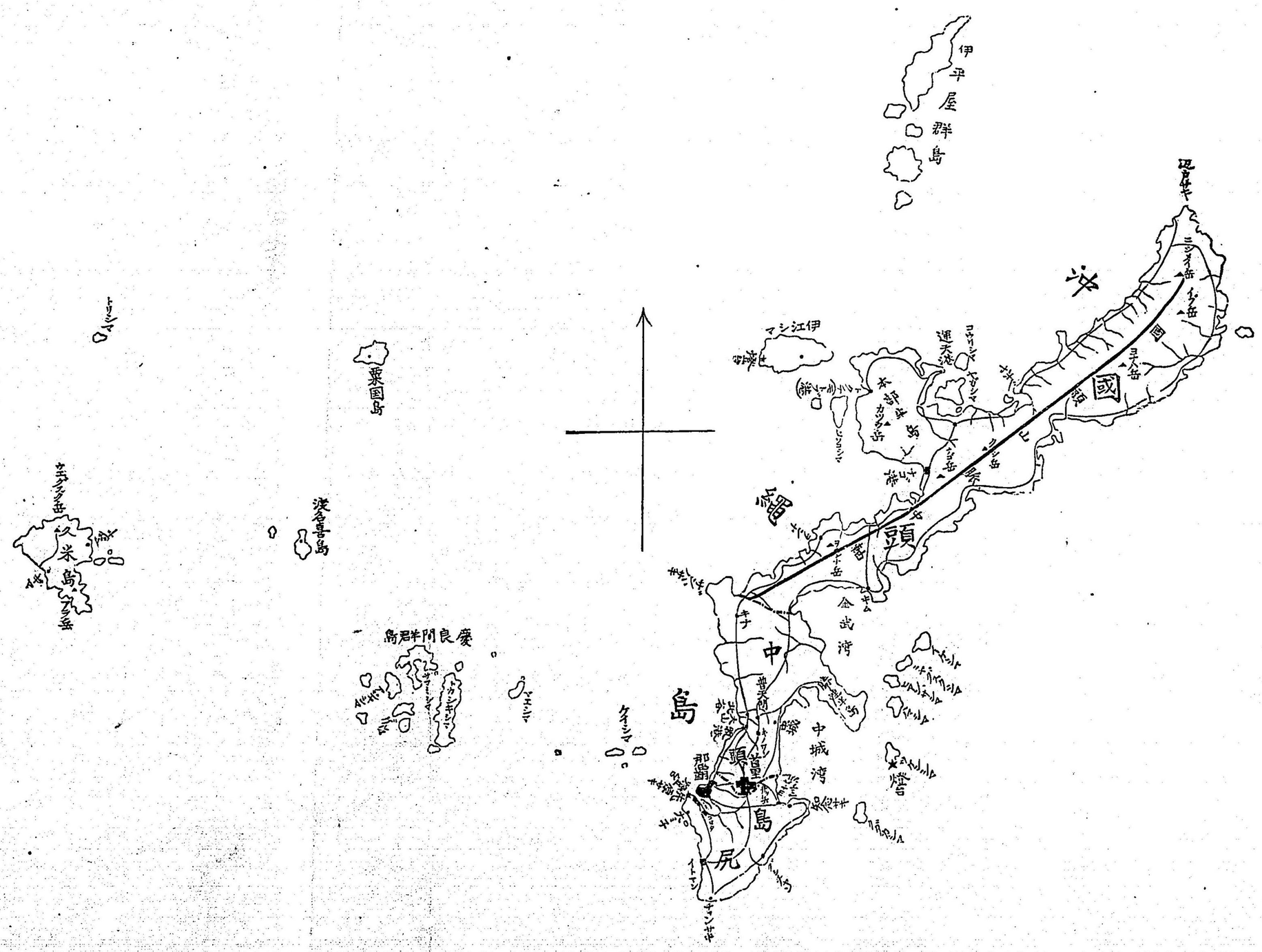
○那覇の飲料水と落平樋　明治橋を渡りて小祿村に至る路上、落平原に清泉湧出して江に落つ、即ち落平樋なり。蓋し蛟坂の小阜を成せる舊珊瑚礁と下盤第三紀層との間に存ずる地下潛流の出口なり。泉口二あり、樋を設けて直に江中に落つ。此の水は那覇市民の飲料水として最も貴重なるものにして、多數の水汲船は水槽を船に載せ、交る〳〵樋の下に來りて水を槽に滿たし、之を市に販ぐ。一日十石餘を汲むを得ると云ふ。

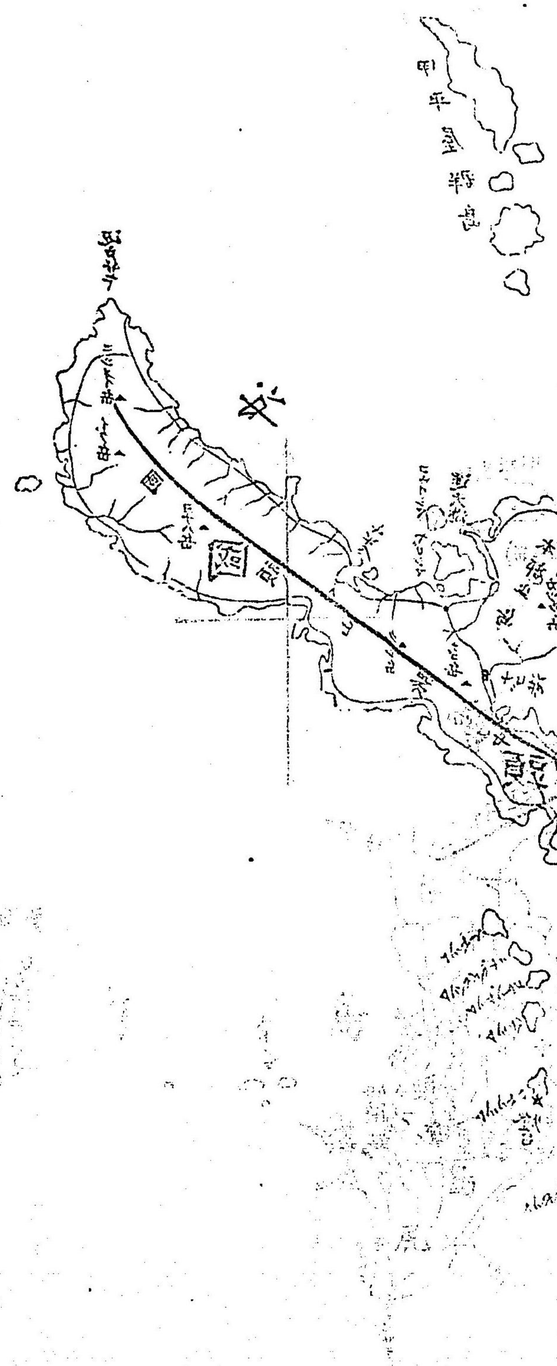
中頭島尻地方が一般に井泉に乏しきは既に前述せしところなるが那覇市も亦飲料水を得るに極めて困難にして、井水は鹹味甚しくして飲むに堪へず。而して落平樋十石餘の清水固より四萬餘の住民一日の需要を充たすに足らず、故に市民は概ね雨水を蓄へて飲料に供せり。即ち簷の周圍に竹の樋を懸け、雨水を一所に集めて大なる水瓶に入れ、滿つれば他の瓶に入れて蓄ふ。炎天の候一週日を經れば多くの子子を生じ、數週の後子子孵化し去れば再び清水となる。斯の如くして貯へ百年以上を經過せしもの少なからずと云ふ。

○那覇の商權　那覇住民の八割は本縣人即ち琉球人にして、街頭に出づれば物を頭にせる琉球商婦より辻待せる多數の車夫に至るまで、勞働に從事せるものは悉く琉人ならざるはなく、市の商權は恰も琉人の手にあるかの如く思はるれども、其の實は然らずして實權は皆內地商人の掌握する所なり。殊に砂糖泡盛反物等主要物產の輸出と米穀雜貨等の輸入を始め、見欲しき商工業は大抵皆鹿兒島商人の經營する所なり。故に那覇に於ける鹿兒島商人の勢力は意想外に大なるものにして、



沖縄諸島全圖


伊平屋群島
マシ江伊
運天港
本部半島
カツン岳
ヒラシマ
ヤガシマ
ヤキ
ヒ
ミシ岳
ヤ
ヤ
ヤ



彼等を措いては何れの事業も成立し能はざる有樣なり、琉球士族の資產あるもの、其の商權を恢復し進んで本島實業界の實權を握らんとして暗々裏に格鬪しつゝあるは那覇商工界の現狀なり、而して此等有資の士族は尙家を中心として多く首里にあり、盛衰相容れざる首里と那覇とが益相反目するに至れる亦已を得ざるに出づるか。

(三)琉球人即沖繩土人に就て

○琉人問題　琉球人の起原及び歷史に就ては、諸書、概ね中山世譜及び中山世鑑等に記載せる處に據りて記述し、大同小異なるが如しと雖、人類學上及び歷史上より琉球人を研究するは頗る趣味ある問題なるべし、然れども此等の問題に就て研究するは世自ら其人あり、予は只滯島中耳目に觸れたる二三の琉人問題に就て述べんとす。

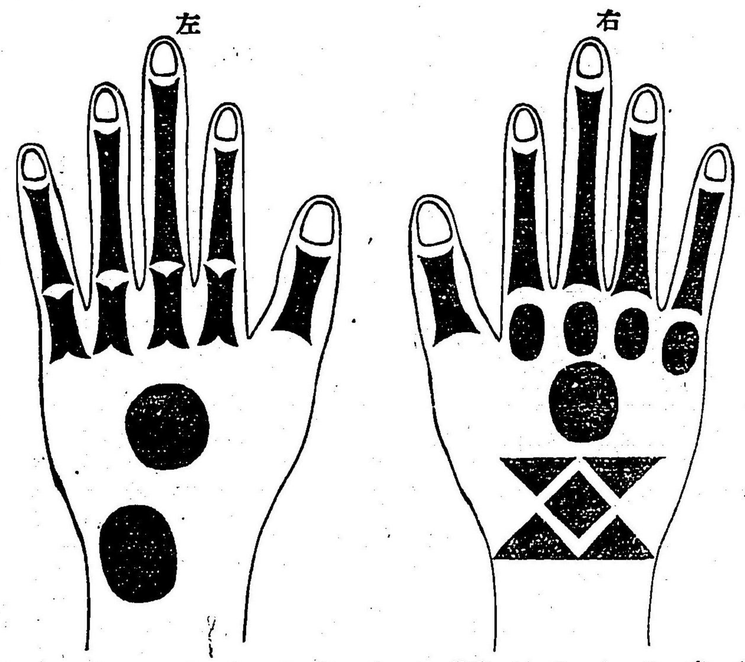
○琉人思想の變遷　由來琉球國は日本支那兩强國の間に挾まれたる一小國なりしかば、維新後我國權の確立せられし前までは、此國の國是として常に兩國の鼻息を窺ひ、兩國勢力の消長に應じて、或は我に附庸し、或は彼に朝貢して、其の半獨立國たる體面を維持せしは歷史の明示する處なり、而して支那との關係は紀元二千三十二年以來、明淸兩朝を通じて冊封慶賀朝貢等常に絕へず、我よりも却て親密なりしと、支那は日本よりも大且つ强なりとの迷想は深く琉人の腦裏に侵染せしとに由り、明治十二年廢藩置縣後も琉人の或ものは心窃に我に心服せず、日淸戰役の際の如き、琉人中最も頑迷なる士族輩は我國の戰勝を信ぜず、窃に容易に我に心服せず、日淸戰役の際の如き、琉人中最も頑迷なる士族輩は我國の戰勝を信ぜず、窃に檄して事を擧げ、以て欵を淸國に通ぜんと謀りたることあり、事漸く發覺せしかば、師範學校にては

當時夏季歸省中なりし生徒をして、急に歸校入舍せしめ、義勇奉公を宣誓せしむる等頗る滑稽に類したるをありしが、我の警戒周到なりし爲、幸に爆發するに至らずして止むを得たり、以て當時の狀勢を徵するに足る。然れども琉人中少なくも中小學等に於て國民教育を受けたるものは、斯かる迷想を抱けるもの固よりなく、加ふるに今回の日露戰役に際しては、琉人の子弟にして從軍せしもの少からず、我國の實力が如何に强大なるかを事實の上に證明せしを以て、迷想者の迷霧も始めて一掃せられたりと云ふ。日露戰役が圖らずも彼等思想の變化に一動機を與へしとは亦奇なりと謂ふべし。

○守禮の邦　古來琉球は守禮の邦と稱し、儀式禮讓を重じ、上下貴賤の別今に至るも嚴肅なり。其の言辭に巧に交際に長ずるは、蓋し歷史の馴致せし處にして、美風の欽すべきなきにあらずと雖、多くは虛禮に屬し、餘弊の及ぶ處亦鮮しと云ふべからず。農民を除くの外、琉球の男子が悠々閑居、飲酒喫煙、歌舞園碁を事とし、力役を欲せず、遂に男逸女勞の習俗を釀成したるが如き、確かに其一なり。

○婦人の風俗　內地より沖繩に至るもの、那覇解頭に上陸して先づ第一に異樣に感ずるは勞動社會の婦女の風俗なり。市場に物を運ぶもの、之を鬻ぐもの、之を購ふもの悉く婦人にして殆ど男子を見ず。以て如何に男逸女勞の甚しきかを見るべし。

彼等役婦は身に筒袖の芭蕉布を寬かに纏ね、襟端を下帶に挾みて帶を占めず、左衽なると右衽なるとを問はざるなり。髮は束髮の如く綏く結びて玳瑁又は木製の太き簪を倒に挿し（士族の女は銀簪を用ふ）尖端額上に向ふ。其の物を運ぶや、手又は肩に依らず、必ず之を頭上に載せ（此時は腎を右或は左に倒す）手を振り肩を



聳かし短衣露脛、跣足のまゝ市中を濶步する狀頗る奇なり（習慣上平民の女子は履物を穿つを得ず）物を頭上に載せて運搬するは、內地にありても諸地方に見る所にして、敢て奇とするに足らざれども、琉球女子の如く、大は泡盛入の大瓶より小は酒を盛りたる小德利に至るまで荷も頭に載せ得るものは悉く載せて運び、（强きものは重量に堪ゆ）甚しきは生きたる豚を瓶包のまゝ頭上に運ぶに至つては頗る珍とせざるを得ず。此の習慣は幼時より養成さるゝものにして、小學生徒が通學するにも書籍辨當の類悉く頭に載せて往來す。故に女子の姿勢自ら直立し、內地婦人の如き前屈婉曲の風姿なきは大に賞すべし。又婦女婚期に達すれば皆左右の手背に黥す。其の模樣右と左と異なれるは圖に示すが如し。（黥の風習は近年漸次減少の傾ありと云ふ）男子は黥せず、又頭上に物を運ぶの慣習なく、荷物は大抵肩に擔ぐ。

士族の女は多く家居して外に出でず、外出するときは必ず傘を携へ草履を穿つ（男子の外下駄を穿つを得ず）其の衣は

夏は概ね芭蕉布又は上布なれども、平民の用ゆるものと縞柄異なれり。（平民の女の着する芭蕉布は浅カーキ色の地に紺筋の入りたる細かき縦縞横縞なり上流の女子は同じ色又は白色の地に紺色のあらき縦縞又は小紋を置きたるもの又紺地縦縞の衣を着す）

○家屋と墳墓　氣候の條に述べし如く、沖縄附近は恐るべき大風の襲來すること屢なるを以て、琉人の家屋は屋根低く柱太く、葺くに厚き赭色の瓦を以てし、繼目を固むるに漆喰を以てす。農家には萱又は阿且（アダニ）（一名ヤコノキ）の葉を以て屋根を葺けるもの多し。而して市中と田舍とを問はず、家を繞らすに必ず高き石墻を以てし、石墻と簷端と相接するに至る（寫眞版參照）。中頭島尻地方にありては、此石墻を築くに最も手近なる珊瑚石灰岩の磊々たる塊片を以てす。故に隙間多く此間隙はたま〳〵ハブ（沖縄特産の毒蛇）の好接處たりと云ふ。

家屋の外觀甚だ擧がらざるに反して、内地人をして其の偉觀に驚かしむるものは琉人の墳墓なり。墳墓の大さは階級によりて一定の制限あり、士族は方十二間、平民は方六間、全部石を疊みて造り、塗るに厚き漆喰を以てす。多くは山腹の斜面又は珊瑚礁の裸出して耕耘に適せざる處を選みて築造し、正面には入口あり石階あり墻壁ありて、蓋宇は穹窿狀にして外圍馬蹄形をなすか、或は家の屋根の形をなす（寫眞版參照）故に皚々たる石墳の山腹に櫛比せるを遠望する時は、人をして白堊の大厦相連なるかを疑はしむ。されは墓地は琉人財産の主要部を占め、貧極れば墓地を賣る、其の價一千圓に至るものありと云ふ。

人死すれば屍を土器に容れて石墳に納め、三年の後其の屍を洗ひ、遺骨を別の骨壺に入れて更に石墳中に藏す。近親のもの墓參する時は、長き黑布を頭より被ふりて全身を蔽ひ、人に手を曳かれて行く、亦頗る奇なり若夫れ送葬の式に至りては更に一層奇なるものありと聞けど實見せざりしを以て述べず。

○言語　土人の言語は純然たる日本語にして其の支那との交通頻繁なりしにも拘はらず、支那語の入りしもの極めて少し。又琉球語中にても沖縄語と先島語と大差あり、沖縄語にても國頭中頭島尻の三部に於て各差異あるのみならず首里と那覇士族と平民との間に於て多少の差異あるは内地に地方語の別あるに異ならずと云ふ。特に注意すべきは妻を「とじ」地震を「なゐ」去年を「こぞ」蜻蛉を「あきつ」と云ひ應答に「オー」と答ふる等、日本古語の保存さるゝもの多きことなるべし。然れども轉訛の甚しきと方言の異なるとに由りて、我々は通譯なくして土人と會話すること能はざりし。

今日にては小學校に於て特に内地語を教ふるを以て學校生徒は概ね皆内地語を解し、又一般土人にありても内地人に接すること益頻繁なるに從て、次第に内地語を解するもの多くなり行くを以て固有の琉球語も漸く内地化するに至るべし。

○教育　沖縄縣は凡ての事業尚ほ幼稚にして將來大に開發を要するものあるに、獨り普通教育に至りては内地の諸縣に比して敢て遜色なきを見る。是れ現知事奈良原男爵を始め縣當局者及び教育家諸氏の處置宜きを得たるに由る者なり。抑縣下に始めて普通教育を布きたるは、明治十二三年の交即ち縣治の初にありて、十三年には那覇に師範學校を創設し、同時に樞要の地に小學校を開きたるを始めとして、爾來年と共に次第に增設し、現今は縣下に百〇三の小學校を有し、生徒の數五万五千人を算するに至れり。之を明治の初年に普通教育に着手したる他の諸府縣に比して、進歩の甚

だ著しきを見る。而して學齡兒童就學の歩合は八十三、六にして出席比例は百に付八十八の割合なり、之を他縣に比して勝るとも劣る所なし、又生徒は一般に學事に熱中し學業の成績大に見るべきものあれども、見聞狹く生活單純なるが故に自ら常識を欠き活用の才に乏しきを遺憾とす。而して內地人をして異樣に感ぜしむるは小學生徒の風俗なり、彼等は習慣上履物を用ゐず、素足のまゝ校堂に上下し、身には一枚の短褐を纏ふのみ、若夫れ素足の蝦茶式部に至りては奇中の更に奇なるものと謂はざるを得ず（那覇首里等の都會の小學生徒は然らず）（寫眞版參照）

目下縣下には百三の小學校と一師範學校の外首里に一の中學校、一の高等女學校、一の工業徒弟學校、一の女子工藝學校あり、那覇に商業補習學校あり、名護に國頭農學校あり、小祿に女子實業補習學校あり、其の他郡立及び間切立の農學校水產學校等ありて、教育の機關頗る完備せるを見る。

四　產物及び生業

○生業の種類及び概觀　生業中最も主要なるは農業（製糖業を含む）及び牧畜にして、工業としては織物及び泡盛製造い外注意すべきものなく、林業鑛業に至りては甚だ微々たるものなり、而して將來開發の見込あるは水產業とす。以下逐次其の概況を述ぶべし。

○農產物及び農業　由來琉人は農の民なり、其の四面環海の島國たるに係らず、其の屢明淸に往來し我に來朝せしに係らず、海事思想の發達頗る幼稚にして、古來嘗て遠洋に航海し圈外に飛躍せしことなく、今日彼等が依て以て海に航する特有の機關は構造粗笨なる山原船（サンバセン）と玩具に等しき刳舟（サバチ）とあるのみ、彼等は其の優秀なる地形上の位置を利用して他國と通商し又無盡藏なる海產物を撈取して商利を博するの勇氣なく、耕地少なき小天地に籠接して、孜々として農耕に勉めたり。故に農業の進歩大に見るべきものあれども、如何せん地域大なる國頭は山嶽中央に蟠屈して耕野少なく中頭島尻の地耕野稍廣けれども、域狹く人多くして（全島四十一萬人中三十二萬人餘は中頭島尻の兩郡に住し人口の密度一平方里五千人以上に及ぶ）山頭水涯既に寸地を剩さず、後來發展の餘地なきを。

先きに述べし如く、削磨臺地の狀態をなせる中頭島尻の地は、溪間水乏しく又平地少なくして稻田を作るに足らず、加ふるに地域の大部分を占むる舊珊瑚礁の風化土たる「マーヂ」は疲瘠にして麥黍の耕作に適せず、故に島民は比較的瘠土に耐ゆる甘藷を栽培して之を常食に充つるに至れり。是れ實に已むを得ざるに出づといへども、亦實に土地利用法の宜きを得たるものなり。

今最近の沖繩縣勸業年報に就て見るに、全縣下の農民は專業と兼業とを合せて、三十九万三千餘人にして、米の收獲は平年三万五千石麥は八千石なり、而して甘藷は三億七千五百万斤に及ぶ。而して特種農產物中最も主要なるは砂糖にして、明治三十六年度に於ける甘蔗の收獲は、全縣を通じて五億三千六百万斤に上り、黑糖の製出高四千五百三十万斤餘、其の價格百四十万圓餘なり、實に本島の糖業は日本國中最も有望なるものにして、夙に當局者の注意する所となり、農商務省は本年より糖業改良事務局なるものを本島に置き、模範工場を開きて糖業の進歩を圖ることゝなれり。技師の談によれば改良によりて砂糖の產額を現今の倍額に達せしむること敢て難からずと云ふ。

○牧畜　牧畜も亦農業の副業として盛に行はるゝ處にして、豚の飼養を最も盛なりとす。豚の飼養法は極めて簡單なるものにして、便所兼帶の豚小屋に於て豚は人糞によりて養はるゝなり（琉球の豚は人糞に

とりて養はるるが故に味殊に美なりと稱せらる故に琉球にては內地に於て直接の肥料となるべき人糞は一度豚なる中間體を經て肥料となり、最も經濟的に利用さるゝを見る。全縣下に於ける養豚の頭數は約九萬頭にして全國他府縣の合計數と匹敵し、食用に屠殺せらるゝもの年に五萬頭を下らず。

豚に次で多く飼養さるゝは山羊にして、其の總數五萬四千頭是亦日本全國山羊數の八割を占め屠殺年に四千頭に及ぶ。之に次で一般に飼養さるゝは牛にして耕牛と食牛を主とし乳牛は少なし。總數約三萬頭、年に屠殺するもの四千頭を下らず。馬は牛より稍少なく總計二萬八千頭なり。沖繩島中、牛は國頭に多くして島尻に少なく、馬は之に反して島尻に多くして國頭に少なし。而して中頭は牛馬相半ばす。是れ地勢の自ら然らしむる所なり。

○海產物及び水產業　本島近海は海產物甚だ豐富なるに拘はらず、水產業は從來殆ど等閑に附せられたるが如き觀あり。是れ一は近海暴風屢起り海上の漁撈危險多きが爲なるべけれども、一は古來海事に疎くして漁船及び漁撈法の發達せざりしに歸するものなり。今三十六年度に於ける水產收獲を見るに僅に十六萬圓にして、一琵琶湖の水產額にも及はざるは寧ろ奇なりと謂つべし。

從來土人が漁獲しつゝある沿岸棲息の魚屬は、異種團体をなし、其の種類甚だ多く、中には彩色甚だ美なるものあれども、其の珊瑚蟲を常食とするが故に一種の臭氣を帶び、味佳ならず、且つ數量限りあり、貯藏多くは困難にして他に輸出して巨利を博するは固より望むべからざるなり。將來最も注意すべきは此等沿岸の魚屬にあらずして、鰹鮪の如き同種團体をなせる熱帶性の魚類なりとす。沖繩島は實に黑潮の衝に當り、此等の熱帶性團体魚は近く之を沿岸數里の海に漁獲するを得るが故に之を內地の如く海岸を去る十數里若くは數十里の沖合に出てゝ漁獲するものに比して其の利益固より同日の談にあらざるなり。漁業にして此點に向て開發せられなば、鰹のみにて年に百萬圓の利益を得ること敢て難からずと云ふ。

此方針に基づける漁場の中心として後來最も望を屬さるゝは、那覇の西方十餘里にある慶良間群島なり。同島は群島間に安全なる錨地を有し、且つ出入最も便利にして、鰹の如き之を近海數里の沖に漁して陸揚し、一隻にして一日二回の往復をなすを得ると云ふ。近時同島の松田牧田等の諸氏相謀りて沖繩水產株式會社を起し、工場を座間味村に設けて鰹節及び罐詰の製造に着手せり。此の事業にして發達せば後來大に有望なるものとならん。

現今漁業の最も盛なるは那覇の南三里にある糸滿村なり。其の年々の收獲高凡そ十萬圓以上にして全縣下漁利の七割を此の一村にて占むるものと謂ふべし。目下全縣を通して漁額の最も大なるは烏賊にして其の價格約三萬圓に上り、之に次くを赤室鰹、鰹、文鰹魚、玉目鯛等とす。

○工業　工業中最も盛なるは織物業にして、之に次げるを酒造業とす。織物中產額の最も大なるは特產の琉球絣（通常薩摩絣と稱す）にして那覇を主要の產地とす。四五年前までは其の總價格二十萬圓以上に及ひしが三十六年後大に其の產額を減じたり。絣に次ぎ盛なるは琉球紬にして、產地により首里紬久米島紬等の別あり、總產出高一年二萬圓內外に及ぶ。又宮古島よりは特有の細上布を產す。芭蕉布は琉球人の着用する所にして是亦年に二万圓內外の產出あり。

酒類としては沖繩特有の泡盛及び芋燒酎あり。泡盛は年產額三千石內外（此の價格約六萬圓）にし

て釀造家の最も多きは首里(百戸)なり。又宮古には黍燒酎の產あり。又現今那覇及び馬天には酒精工場あり、此等も漸を逐て發達するに至らん。

琉球絣の染料たる泥藍は主として國頭地方にて製せられ、年額七万圓を下らず。次に特產の漆器(朱塗)は年額二萬圓を出でず。專ら那覇にて製せらる。又近來阿旦(アダン)の葉を晒して夏帽子を製するの特有す業大に起れり。外觀バナマ帽に類し、臺灣產に勝る。

○輸出入　內地及び臺灣に向て商品を輸出し及び輸入するは、那覇港を以て殆ど唯一の門戸とす今同港に於ける輸出品の主なるものを擧ぐれば黑砂糖(二百万圓)織物(八万圓)泡盛(六万圓)芋蔓(五万八千圓)尺蓮(三万圓)葉煙草(二万九千圓)小麥(二万九千圓)泥藍(二万圓)等にして、輸入品の重なるものは米(百四十万圓)大豆(十一万圓)茶(十一万圓)紡績(十一万圓)素麵(八万四千圓)石油(七万四千圓)種油(五万一千圓)板材類(七万九千圓)等なり。以て同地商業の大勢を窺ふべし。而して輸出總額は三百二十三万圓輸入總額は二百三十五万圓とす。(以上明治三十六年統計に據る)

○特殊の動植物　終に臨み本島特有の動植物に就て一言せんに、草木は姑く措き、特種の植物景を作る林木は、沖繩松 Pinus luchuensis, Mayr. フクギ Garcinia spicata, Hook アカギ Bischoffia javanica, Bl. フクロギ Euphorbia neriifolia, L. アカテツ Sideroxylon ferrugineum, Hook et Arn. ヤラボ Calophyllum inophyllum, L. デーゴ Erythrina indica, Lam. ロハティシ Terminalia Catappa, L. ガジュマル Ficus retusa, L. アダニ Pandanus tectorius Sol. var. liukiensis Warb. バナナ Musa sapientum, L. ソテツ Cycas revoluta, Thunb. ヘゴ Cyathea spinulosa, Wall. ッグ Arenga Engleri Becc. ビロウ Livistonia chinensis, Br. 等の亞熱帶性及び暖帶性の植物なりとす。殊に島尻中頭地方に特有なる植物景は珊瑚臺上に於ける沖繩松と蘇鐵の粗林、水邊に於けるアダニ、ユフナキの矮林、村落に於けるガジュマルの喬木なりとす。ガジュマルは寫眞版に示す如く、枝より房の如き數多の氣根を垂下し、其の生長して地上に達するや、細根融合して太き幹狀を呈し、孰れか主幹なるや紛はしきに至ることあり。世人往々ガジュマル Ficus retusa, L.を以て榕樹 Ficus Wightiana と混同すれども榕樹は沖繩にてウスクと稱し、ガジュマルより稀にして稍長き葉と長き葉柄を有し氣根を生ずることガジュマルの如く多からず。

動物中最も人の注意を惹けるは飯匕蛇(ハブ)(一に飯匙に作る)なり、蓋し其の嚙毒の甚だ恐るべきを以てなり。飯匕蛇には金ハブと銀ハブの二種あり。金ハブは全身黃色にして黑條あり、長さ一尺五六寸、軀体小なれども嚙毒殊に劇烈なり。銀ハブは全身白灰色を呈し、黑色の條紋あり、長さ四五尺より七八尺に及ぶ。ハブの人を襲ふや、一旦躰を螺旋狀に卷き、急に頸部を伸長して打擊するを以て土人は「ハブに嚙まる」と云はずして「ハブに打たる」と云ふ。國頭地方にては被害者殊に多く、年々百四五十名の被害者中三四十名の死者を出すと云ふ。縣廳にては懸賞によりてハブの頭を買上げ、又ハブ狩を備ふて之を捕獲せしめつゝあれども、彼等は概ね石墻內に匿れ、日中外出すること稀なるを以て、容易に之を驅除するを得ず。長く琉球に在るもハブを見ざるもの多し。人往々琉球には該蛇到る處に飼育して人畜を害する如く傳ふるは虛誕なり。

ハブよりも著しく旅行者の目に觸るゝは、室內に蜚蠊(ゴキブリ)及び蟻(何れも赤蟻にして數種あり)の多きことなり。蜚蠊の害殊に甚しく、如何なるものも咬傷し、就寢後食物の附きたる指頭等を咬傷せらるゝことありと云

ふ。以て如何に其の害の甚しきかを知るべし。

(五) 運輸交通

○內地との交通　現今內地沖繩間の運輸交通に從事せる定期汽船は左の如し。

大阪商船株式會社に屬するもの、　御嶽丸(九百噸)二見丸(七百噸)

鹿兒島郵船株式會社に屬するもの、　沖繩丸(千二百噸)薩摩丸(九百噸)

廣運汽船株式會社に屬するもの、　廣運丸(千二百噸)

客船としては沖繩丸設備最も完全なり、一等船客十人を容る。此の外臺灣通の汽船臨時に寄港することあり。

定期汽船は神戸(又は大阪)を發して三日目に鹿兒島に寄港して茲に一日を費やし、鹿兒島出帆後更に大島名瀨港に寄港して三日目に那覇に着す。故に神戸(又は大阪)より一週間にして那覇に至ることを得るなり。復航の際も之に同じ。從て一汽船は大約一ヶ月に二回大阪那覇間を往復することゝなる。然れども此の航路には日向洋及び七島灘の難處あり、殊に七島灘は黑潮の衝に當りて波浪常に高きに加へて沖繩大島附近は屢暴風の襲來を受くることあるを以て航路難を以て航海者間に著名なる處なり、(鹿兒島那覇間三百八十四浬の間避難すべきは唯大島の名瀨港及び瀨久灣あるのみ)故に定期船といへども一二日の遲着あるは決して珍らしからず。內地との交通には尙一層の改良を要するものあるなり。

○臺灣八重山及び離島間の交通　那覇より臺灣及宮古八重山方面に交通するには、那覇汽船會社の平安丸宮古丸等の汽船あれども孰れも四五百噸の小汽船なり。又離島間の往復には運輸丸(八十

噸)と稱する小汽船あり。其の航路二ありて一は慶良間、久米、渡名喜、粟國の四島に航し、一は名護、本部、伊平屋に航するを例とす。二航路とも往復に四日を要し、交互に航行す。但船体小なるが上に、黑潮の流路に當りて風なき日にても船の動搖甚しく、頗る不愉快なる航海とす。

○山原船と刳舟　山原船は其の構造支那のジャンクに類し、概ね六七十石積の帆船なり、主として島內物資運輸の任に當る。其の國頭即ち山原地方より薪炭用材等を那覇、與那原に運搬し來るもの多きにより此の名あり(寫眞版參看)刳舟は長さ三間幅二尺計の細長き刳舟にして、形小笠原島邊のカヌーに類して稍大なれども、カヌーの如く顚覆を防ぐ爲めの腕木及びウケ木なし。土人は此の舟に帆を擧げて能く風濤高き外洋を駛走す。多くは近海の漁撈に用ゐらるれども、時として短距離の交通に充てらるゝことあり。

○島內の旅行　若夫れ島內陸上の旅行に至りては更に一層困難なるものあり。沖繩島には那覇を中心として目下新道の開鑿せられたるもの四條あり。一は那覇首里間の一里、二は那覇馬天間の三里、三は那覇より糸滿に通ずるもの(全長三里餘の中二里許既通)四は那覇より名護に至る幹線(目下那覇より北谷まで四里餘開通せしのみ)是なり。此の四條は幅三間乃至四間の新道にして車馬を通すべきも、他は概ね車馬を通せざる惡路小運のみ。又縣下には那覇に三四軒の客舍ある外一の宿泊すべき旅店なし。故に島內を旅行せんとするものは食糧寢具を携へ縣官の庇護を得て各間切役場又は小學校に至りて宿泊せざるべからず。其の不便困難滿韓の山間を旅行すると選ぶ處なし。然れども縣官の威嚴能く行はれ、到る處待遇懇切を極むるは、內地に見るべからざる處にして、大に旅情を慰むるに足るものあり。往時は島內を往

來するもの皆轎を用ゐしが、今は殆ど廢せられ、人力車之に代れり。人車は賃銀廉なるが故に之に乘るもの頗る多く、首里那覇間の如き實に車馬殺聲を以て形容すべし。然れども車道以外の險路を步することを欲せざるものは轎又は馬背に依るの外なし。

予は講習結了後運輸丸に便乘して慶良間島及び粟國島を見ることを得たれば、左に其の概要を述べて旅行談を了らんとす。

(六) 慶良間群島

慶良間群島は明人之を鷄籠嶼と書し、清人之を馬齒山と稱したるものにして、那覇の西方約二十浬にある小島の一群なり。前渡嘉敷（ニトカシキ）、座間味（ザマミ）、阿嘉（アカガ）、慶留間（ケラマ）、フカシ、屋嘉部、屋嘉比、アケナ、古座間味、黑等の諸島嶼より成る。諸島中最も大なるは渡嘉敷（周圍四里二十町）にして、之に次ぐを座間味（周圍四里十二町）及び阿嘉（周圍二里十八町）とす。他は皆周圍一里に滿たざる小島なり。此等の諸島によりて圍まるゝ海面は何れの方向より來る風をも防遮するが故に、自然の良錨地を成せり。故に那覇港に碇泊する汽船の暴風に逢ふ時は、難を此の島陰に避くるを常とす。

群島は德永氏の所謂古生層より成り、絹雲母片麻岩及び片岩、石墨片岩、石墨絹雲母片岩、輝石片岩を主岩とし、外觀四國の三波川層下部に似たり。中に就き絹雲母片麻岩はモザイック構造を成せる石英、多少陶土化せる正長石及び微長石（外に少許の斜長石あり）及び絹雲母より成り、副合分として石墨、金紅石、褐子石、綠簾石、赤鐵鑛、チタン鐵鑛(?)を有す。灰白色或は青灰色の片狀岩にして、稍分解せるものは黃色を呈す。片岩理は稍完全なるもの（絹雲母の多く發達せるもの）と不完全なるものとあり、時として長石の徑半「センチ」大の斑晶を有することあり、或は不完全なるフラーゼル石理を呈することあり、或ものは秩父の絹雲母片岩に類し、或ものは四國の大ボケ片麻岩に酷似し、又或ものも長砂岩狀を成す。要するに本岩は硬砂岩の變性せしものならん。絹雲母片岩は片麻岩よりも細粒にして、新鮮なるものは灰白色、稍分解せるものは黃色を帶ぶること片麻岩に同じ、一種の變質砂岩なり。此等と互層せる石墨片岩及び石墨絹雲母片岩は、概ね黑色にして絹絲光澤を有し、薄板狀に剝離す。多くは多少黑色の斑點を有す。其の風化せるものは概ね漂白せられ、又滑石片岩樣の岩に化することあり、時として粘板岩若くは砂質粘板岩と見分け難きものあり。故に粘板岩より變性したるものたるや明かなり。

此等諸岩の層向は區々一定せざれども南北を主方向とし、座間味島の阿護浦に南北に走れる向斜軸ありて、兩翼の傾斜は三十度より五十度に至る。

此の如く本群島は沖繩島の國頭地方と同一の地層より成り、山勢島尻の如く緩ならずして、頗る急峻なる傾斜を示し、山上には沖繩松及び翠綠滴らんとする常綠濶葉樹の密林繁茂し（ツゲ、クワ等の特產あり）、從て溪間清泉に乏しからず、野獸の好棲處となれり（山間鹿多きを以て有名なり）。飯匕蛇は渡嘉敷及び阿嘉に產じて、座間味及び慶留間に產せずと云ふ、甚だ奇なり。

汽船の碇泊するは座間味村の座間灣なり。座間味村は間切役場の在る所にして、居民純朴極めて平和なる一小樂天地とす。此の島にては國頭地方と同じく家の周圍にツゲ、フクギ、アカギ、ガジュマル、クワ、マキ等を密植して風害に備へ、島尻の如く石墻を繞さず。村落は恰も一大森林の觀を呈せり。村內に入れば街區整然として甚だ清潔なり。村民概ね農を業とし、家々山羊を飼ひ鳴聲村內に滿つ

又近時松田氏等の主唱により、此村に水産工場を起したるは既に陳述せし所なり。

(七) 粟國島

粟國島は那覇港の西北五十浬の海中にある一孤島にして周圍約三里、島形略ぼ半圓形をなせり。此の島は鳥島及ひ久米島と共に、琉球列島の內面に沿ふて並列せる火山島の一にして、霧島山、櫻島、海門岳、硫黃島、口之永良部島及ひ土噶喇七島（或は川邊七島）等と同一の火山系に屬するは諸先輩の既に唱導せし所なり。

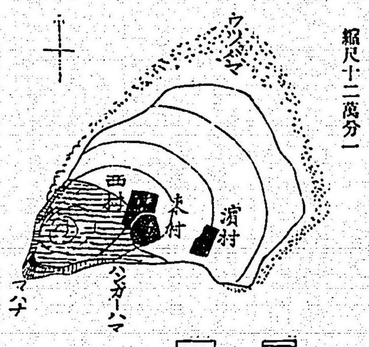
島の構造を觀るに本島は海中火山の一片が海面上に隆起したるものにして、西南隅に最高處海拔五百尺あり、之より地勢東北に向て漸下し、北及ひ東の二邊は低き海濱に終り、南岸の西半及び西岸の南半は百尺乃至四百尺の斷崖をなして海に臨めり。此の斷崖には火山質の諸岩層露出せり、其の列次左の如し。

第一層（最上部に露はるゝもの）綠色安山岩質の集塊凝灰岩にして甚しく風化すれとも長石の斑晶を存し、處々に球葱狀組織を呈す、層理明かならず、下層に漸移す。

第二層、白色浮石質の凝灰岩にして厚さ前層に數倍し、西南隅なるマハナの海岸に高さ三百尺以上の絕壁をなして、海に臨み、頗る偉觀を呈せり。一部分は細粒にして房州砂的外觀を呈し薄板狀に壞れ易く（土人は之を磨砂に使用す）他の一部分は粗粒にして粗大の浮石片を交へ板理明かならず（土人は之を以て貯水用の石臼を製す）此の兩部分は細かく互層するを以て斷崖に於ける層理甚だ分明なり、全層北西に緩斜す。

第三層、拳大乃至頭大の磊々たる輝石安山岩塊より成れる集塊岩にして、方解石脈に富み、處々に

粟國島地質圖



ハンガー濱沖より粟國島を北方に望む

同質の安山岩の層盤を挿む、該安山岩は暗黝色にして數多の長石斑晶を有し、一部分杏子石狀を呈せり。長石は鏡下に檢すれは固有の双晶帶明かに發達し、帶狀に排列せらるゝ多量の玻璃包体を含み、消光角によりて基性の曹灰長石たるを知るへし。輝石は單斜系に屬し、黃灰色にして複色性著しからず、一種の透入双晶をなせるものあり。此の集塊岩は島の南岸なるハンガー濱に現はれ、波浪と雨水の削磨を蒙りて此の種の岩に特有なる山貌を呈し、奇巖怪石雜然として海濱に橫はるを見る。

此等の火山噴出物の累層は北又は北西に向て緩斜し、且つ南岸

なるハンガー濱は水深く新瑚珊礁の發達するなきを以て見れは、噴火の中心はハンガー濱沖にありしものゝ如し。而して火山噴出物より成れる西南隅の高地より西北に向て斜下せる緩斜地は悉く隆起珊瑚礁より成り、段丘的に海に向て漸下せるは、沖繩島南部に見る所と更に異なる處なし。是に由て之を觀れば本島は初め海底に噴出したる火山の一角海面上に出でゝ島となり、其の外緣即ち西北側に珊瑚發育して礁を作り、後漸次に隆起して今の島形を完成せしものなり。

住民の部落は東西及び濱の三部落に分れ、戸數八百餘、人口約五千あり。島内溪水なきが故に水田を作るを得ず、住民は甘藷を栽培して之を常食とす。又井を穿つも水を得ざるを以て石甕に雨水を貯へて飲料とす。多くの石甕を有せざる貧者は、遠く桶を頭にして濱村の斷崖を下り、崖下に湧出する少量の水を汲まざるを得ず。又島内樹木少なきを以て（最も多きは阿蘇鐵且と蘇鐵なり）其の莖は舂きて澱粉を製し以て凶年に備ふ。如何に生活の困難なるかを想像するに足る。斯の如く本島は人口の多き割合に物資甚だ乏しきを以て、生活の程度甚だ低く、沖繩縣中の最下位にありと稱せらる。故に壯丁は概ね他島に出稼し、女子も那覇首里等に下女として傭はるゝもの甚だ多し。島民の多くは裸體にして海濱に漁し極めて游泳に巧なり。船の粟國に着するや阿且樹下より裸體の黑影續々として現はれ來りて喧囂を極め、人をして南洋蠻人の域に入りしかを疑はしむ。家屋は陋隘にして茅を以て屋根を葺き、其の勾配の甚だ急なるは沖繩に見る所と稍異れり。但し家の周に石垣を繞らすは全く趣を一にす。

終に臨み濱島中惡篤なる歐遇と種々の便宜を與へられたる奈良原知事を始め岸本事務官齋藤郡長西村師範學校長橋本同教諭桑縣視學山口仲本兩縣屬其他在縣廳在學校及び公私諸賢の高誼を鳴謝す。

誤

五頁六行目	三十尺	誤
仝頁第一圖	新珊瑚礁	正
七頁十四行目	數十	
九頁十六行目	位地	低地
十一頁三行目	一目に望み居れば	一目に望み得れば

正

三頁五行目	連ぬたる	正
五頁第一圖	犬山	大山
六頁三行目	繼續的	繼續的
七頁十七行目挿註	堅孔	堅孔
十頁八行目	斬波の下崎字を脱す	
十二頁十一行目	混亂	交代

22
1394